読んだ読んだ「盆土産」読み取りの足跡

一組　一場面

主人公は、父親が帰ってくることを聞いて、とてもうれしく思った。でも、帰ってくることをもっと早く伝えてくれれば、自分がこんなに忙しくならないと思い、少しうれしさの中にお騒がせな人だと思っている。

しかし、こんな気持ちがあっても、父が生そばを食べるときの顔を思い浮かべながら、釣りをしている。

小川さん

主人公は、何気なく「えびフライ」と言っているつもりなのに、「えんびフライ」と言ってしまっている。何度も練習して「エビ」と言えるようになって、みんなに自慢しようと思っていたのであろうか。父親が急に盆に返ると言うので、みやげの「えびフライ」という言葉も父にも言って自慢したい。父は、生そばを食べないと帰ってきた気がしないと言い、主人公はれゆえ慌てていた。それに、夕べの雨の影響で川が濁っていたりしたらと、気が気ではなかった。父親が帰ってくると聞いて、とてもうれしいが、川で焦って釣りをしている。

松波君

主人公は、年に何回か数えるほどにしか会えない、大好きな父親が帰ってくることを速達で知った。その父親のために、父親が好きな生そばを作ろうとしている。でも、父親のお土産のえびフライが気になって、つぶやきながら釣りをしている。

柴田さん

主人公は、河鹿を驚かせないように、「えびフライ」と言えるように練習をして、父親の土産の名前が言えるようにしている。そんな優しい気持ちで「父っちゃのだし」を作るため、雑魚を捕って父親を喜ばせようと思いながら、釣りをしている。

山本君

主人公は、河鹿を気遣うほど優しいということが分かる。えびフライと何度もつぶやいてしまうのは、「えんびフライ」の発音をなんとか直したいと努力している様子が伝わる。大好きな父親が帰ってくるので、どうにか父親の好きな生そばを食べさせようと、一生懸命、とても焦って釣りをしている。

近藤さん

主人公は、「えびフライ」という言葉をしっかり言えるようになりたくて、何度も繰り返して練習している。姉に指摘されないし、父にしっかり言えることを言えるからである。主人公は父親思いで、父親が盆に返ってくると分かると、大変だと思いながら、一生懸命父親の喜ぶ顔のために釣りをしている。

金谷君